

創刊のことば

豊田市矢作川研究所 会長

鈴木 公平 (豊田市助役)

良質の水を供給してくれる河川があつてはじめて人々の生活が営まれ、水の供給が限度に達するとその流域の活動も限界に達します。このことは、平成6年の全国的な渇水の際に多くの人々が肌身で感じました。

豊田・加茂圏域の人々の生活はもとより、流域の人々の生活の根底は矢作川に支えられています。その矢作川には7つのダムがあり、近年の水の利用率は平均40%にも達しています。従って、わずかな降雨の変動でも深刻な水不足となりやすく、昭和46年に運用を開始した矢作ダムと利害関係者の積極的な協調のお陰で乗り越えているのが実態です。

節水型社会への転換努力は続けられていますが、一方では生活の利便性や快適性を追及する動きがあり、結果は水の使用量の漸増となって表われてきています。

また、近年では自然に親しむ人々が増え、特に都市近郊に豊かな自然を残す矢作川の場合は、水に親しむ人々が激増し、山間に位置する町村の活性化にとってもまちづくりの貴重な資源となっています。清らかで豊かな水流が保たれ、豊かな自然生態系が保全されている河川への期待は高まるばかりです。

しかし、最近では魚種の減少や糸状藻類の異常繁茂あるいは節水の恒常化がめだってきています。その理由として、水源林の荒廃や水利用率の向上に伴うダム下流部の水枯れ区間と期間の拡大や河床の流下土砂の供給減少等を指摘する声があります。

矢作川は、豊田市を境にその上流は急峻な地形であり、水不足への対応は最終的には貯水ダムの活用に頼らざるを得ません。そして、ダムを効果的に

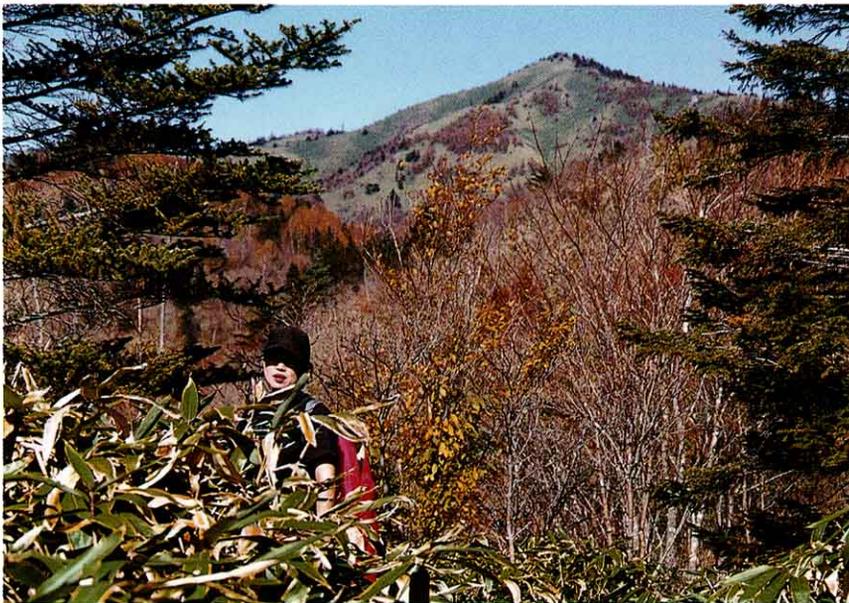
活用するためには水源の山の保水力を高めると同時に土砂流入（ダム堆砂）を防ぐ必要があります。

一方で、河川には治水、利水などの関わり、水源の山には治山、林業などの関わり、そして全体を通して自然環境、生活空間などの関わりがあり、立場や見方によって様々な利害や価値観の交錯があります。

しかし、それぞれの立場を是認したうえで豊かな水量ときれいな水質、そして自然生態系の保全が図られることに異論は無いものと思います。

科学的な手法を模索して矢作川の現状を調査研究し、疫学的な手法を模索して自然豊かな矢作川を保全する具体策を探求し、客観的な議論の材料を社会に提供することの意義は大きなものがあります。このような思いのなかで、豊田市矢作川研究所が発足しました。

「治水」と「利水」で語られてきた矢作川が、最も快適な生活空間、都市空間として見直され、あるいは自然環境との共生を象徴する存在として、その社会的価値が再評価されてきています。まさに、母なる川への感謝の気持ちをこめ、とりあえず私たちにできることからやりたいという気持ちで調査研究活動を始めました。今後、国、県のご指導を得ながら、流域の市民として現場と密着した調査研究を深めてまいりたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。



矢作川源流の大川入山 標高 1908 m